

ある高原の、カメラを仕掛けた巣箱に、梟が卵を産んだ。それは毎日インターネットに生配信され、大勢が見ていた。梟の妻は何日も動かず抱卵を続け、二十日も過ぎ、一向に孵らない卵に観衆はジリジリする。ある日罅が入って、ウラルフクロウの雛が一羽孵った。まさに、「ふはふはのふくろうの子のふかれをり」（小澤實）である。

子育ても妻がつききり。夫は叱られどおしだ。「餌が遅い」「そこ邪魔」。夫はおろおろし、やがてふらっと出かけてしまう。人の夫のように。夜になるとふらっと来て、野鼠の宅配をする。「今行く」「遅いっ」という夫婦の掛け声。そして毛糸玉のような大きさの雛が、「鼠丸飲み芸」を披露する。涙目で固まりながら。観客は当初驚くが慣れてしまい、段々フレーフレーになる。

妻はガウガウ、夫はオッホイ、雛はピキッと鳴く。ゴロスケオッホイは所謂聞きなしである。「檻樓来て奉公梟に親のゐて」（ふけとしこ）とはよく言ったものだ。

次第に夫婦での留守が増える。独りぼっちの雛は「ピョッポイ」なんて鳴く練習したり、羽ばたきの練習しながら転んだり。梟は眼球が動かないので、顔を回してもものを見る。誰が名付けたかヒナザイル。その可愛いことったら。やがて巣箱のお立ち台に立ち外を眺めるようになる。妻はお立ち台の雛に餌をひらりと渡すが夫は失敗したりして、妻の怒る声の大きいこと。「貸してっ」と瞬時の妻の再配達の見事なこと。

若葉に光が透ける頃、雛はお立ち台に上がっては降り、何日も巣立ちを迷いに迷う。ふた月ほど中継を見守った人々の熱いメッセージが、パソコン画面に流れる。「行かないでえ」という声、「飛ぶんだ」という声。小雨まじりだから今日はやめるだろうと思っていたある夜、それはあつという間だった。行ってしまった。二度と戻らなかった。みんな雛ロスになった。外の光だけが入る空の巣箱。

しかし大人になるまでまだかかるので、一家で近くにいる声だけは聞える。おまけに頼りない梟夫は、空っぽの巣箱に鼠の宅配を何度もしたのだ。今は毎日雛と一緒になのだ。しっかりカメラに映された失態。「あれっ？なんで誰もいないんだ、オッホイオッホイオッホイ」。『壕ねぶたしほつほと修羅に鳴く梟』（中勘助）。